The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エッセイ : あるバティックデザイナーに目を向けて : インドネシア・ジョグジャカルタでの調査より
Author(s)	塚野, 理加
Citation	未来共生学. 2019, 6, p. 177-180
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エッセイ

あるバティックデザイナーに目を向けて

インドネシア・ジョグジャカルタでの調査より

塚野 理加
未来共生プログラム元履修生（1 期生）

筆者は、未来共生プログラムを離れた2016年以降、毎年1～2か月、インドネシア共和国ジョグジャカルタ市に滞在し、伝統的ろうけつ染めバティックを軸に調査活動を行っている。プログラム在籍時にも研修や調査で滞在した古都には、2つの王宮が現存している。バティックはこの王宮で発展し、民衆に広まっていった歴史があり、現在でもバティックを扱う工房や店舗が多い。

バティックは手作業で柄を描く手描きバティック（batik tulis）、金属製のスタンプで型押しするスタンプバティック（batik cap）、機械印刷でバティック風の柄を表現したプリントバティック（batik printing, batik cetak）の3つに分けられる。筆者が主に調査しているのは完成に数か月を要する手描きバティックである。大量安価に機械生産されるテキスタイルに押され、その衰退が危ぶまれたが、2009年、ユネスコによるバティックの無形文化遺産認定を受けてからは関連行事が開催されたり、流行のファッションに取り入れられたりと再び隆盛している。市場には高級な手描きバティックから安価なプリントバティックまで幅広い価格、品質の製品があふれ、一見バティックの伝統は現在に脈々と受け継がれている印象を受ける。

筆者は滞在先にて20世紀半ば、バティックの図柄をデザインし発展させたルビナという女性の存在を知った。彼女の家族や隣人などにルビナのバティックを見せてもらいながら聞き取りを行っている

（写真1、2）。

ルビナが住んだセントルレジョ（Sentul Rejo）は、ジョグジャカルタ市内中心部のスルタンアグン通りを一本入ったところにある静かな住宅地である。そのうち一軒に100枚を超えるバティックの柄の原紙が保管されていることは外からはうかがい知れない。ルビナは1912年頃スルタン王宮の近くで、王宮に仕える侍従（abdi dalam）の両親のもと誕生した。母親は王妃についてロウ描きをする侍従で、バティックに関する知識や技術は母親や周辺の環境から身に着けたと考えられる。1925年、王宮に与えられたこの地に越してきた。ルビナへの注文は2通りあり、店舗や販売網を持つバティック業者（Juragan batik）と、個人的な知り合いからの注文であった。一部のバティック収集家の間で名が知られるサエバニ（Saebani）というバティック業者からも柄の依頼を受けていた。

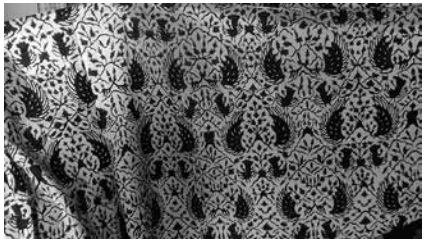

写真1. ルビナ自ら製作したSido Asih（シドアセ）という図柄のバティック（全体図）。現在は家族が保管。

写真2. Sido Asih 拡大図。Sido Asihはジャワ語で「愛情に満たされる」という意味を持ち、特に結婚式で着用される。

ルビナが健在だった1980年代は近所の住人が彼女のデザインした柄を鉛筆で布に写す作業（coret）を手伝っていた（写真3）。結婚式では新郎新婦と親族用のバティックの注文が入るため、一度に数十枚の注文が入ることもあった。当時まだ学生だったこの住人は、学業の合間に作業して1枚あたり3～5日程度かかっていた。10枚程度完成すると図柄と布をルビナの家に持って行く。その後市内の別の地域でロウ描きを行い、バティック業者の染色設備で染めたあと、店舗に並んだり、顧客のもとに届けられたりした。

写真3. 下書きはガラス机に図柄の紙と布を敷き、鉛筆で写す。写真は跡継ぎのアンティが作業をする姿。

ルビナは近所で結婚式や出産前の儀式があると、ふさわしいバティックの柄を選んだり、供え物を作ったりもしていた。たとえば彼女と親しかった母親を持つ女性は、1961年の結婚式でルビナがデザインし、近所の女性がロウ描きを行ったという海の生き物の柄のバティックを着用した。またジャワの結婚式ではヤシの実に針で、影絵人形（ワヤン）の登場人物を描く飾りがあり、それを製作した型紙も残っている。現在これらの仕事は衣装のレンタル業者が行うのが一般的だという。

ルビナは2005年に亡くなった。生年が定かではないが、亡くなったときの年齢は80代後半から90代であったといわれる。彼女の没後は姪のスハルミ、そして現在はその次女アンティが図柄の管理をしているが、ルビナの頃のように新しい模様をデザインすることはなくなった。現在はごくたまに下描きの注文が入る程度である。

スハルミの長女アニーによると、ルビナのデザインの特徴は伝統的な柄を洗練化したり、柄の隙間を埋めるイセンという模様を多様化させたことだという。また、王宮では一般的でなかった動物の柄をユニークに表現した柄もみられる。ルビナと同時期に王宮から越してきてロウ描きをする女性は他にも存在したが、バティック業者に図柄を提案できたのはルビナだけであった。ルビナ自身はバティック業者ではなかったが、業者の注文を家族や隣人に割り振っていた。

一時は大統領などの権力者に好まれたサエバニも経営が立ち行かなくなり、すでに廃業している。サエバニのようなバティック業者と、業者から受注していたルビナのような人はジョグジャカルタ市内に存在したようだが、プリント布の台頭や後継者不足によって徐々に姿を消していった。ルビナを実際に知る人々も高齢化が進んでいるが、今後も調査を進め、彼女の存在を少しでも多くの人に知っても

らいたいと考えている（写真4）。

上記の調査と並行し、筆者はバティック柄のプリント布を使った日本向けの雑貨作りにも取り組んでいる。現地の市場で選んだ布を縫製作業所に持ち込み、エプロンなどを製作している（写真5）。10人ほどの従業員がいる作業所は小規模ながらフェアトレードの理念をもって運営されている。現在は少量の生産で知人を通じて日本で販売している。ろうけつ染めのバティックに比べ、安価で品質が安定しているプリント布地の多くは、ジャワ島ではプカロンガンやソロの工場で生産されていることが多い。市場では、伝統的な柄を模したものに加え、本来のバティックに見られない柄も市場ではバティック布と呼ばれて売られていること、流行の色、柄があることが分かった。今後は少しずつ生産量を増やしながら、手書きバティックやスタンプバティックなどを使った製品にもつなげていきたい。

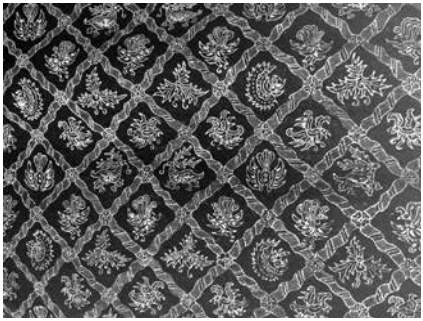

写真4．ルビナの図柄をもとに新しく製作したSido Mulyo柄のバティック。

写真5．バティックのプリント布を使ったエプロン。